

戦後 上方落語の60年

〈78〉

戸田 学

森乃福郎の活躍



タレントとして関西放送界で大活躍した初代森乃福郎

昭和31年4月、三代目笑福亭福松に仲川吉治という青年が入門した。前年、大阪北浜・三越劇場で開催された新関西新聞主催の演芸コンクールに出場、詰め襟姿で「強情灸」をしゃべった。この時の審査員であった奥野しげるに「京都で一番えらい人は誰でんねん？」と訊ね、笑福亭福松を紹介された。入門して、笑福亭福郎を名のる、後の森乃福郎（初代）である。

彼は上方落語の売れっ子タレントの元祖でもある。当時、関西の放送界は一種の独立国家的な要素があって、独自の

福郎の実家は京都・先斗町のお茶屋である。京都府立鴨沂高校出身。高校時代、学園内で男前コンテストがあった。「一位が柴田吾郎（俳優・田宮二郎）、二位が私やっ」というのが本人の弁ではあるが、福郎がいうとおり、

彼は二枚目のルックスである。入門して8か月後の昭和31年12月に戎橋松竹で初舞台。福郎が売り出したのは、落語家としてよりも、むしろ漫談家としてであった。

まずはラジオでCMや司会、DJタレントとして活躍する漫談は、柔らかい口調、スマートなルックスに反して関西独特の下がかったネタが多かったようである。漫談が活動の中心になったことから、松竹新喜劇の藤山寛美に勧められ、寛美の命名で昭和36年の後半、屋号を笑

て古今亭志ん朝は「とにかく福郎さんを見て（売れ方が）ものすごい人だなと思った」と言っていた。

昭和40年代後半からも、「八木治郎ショー」（土曜）、「奥さん！ 2時です」（火曜）といった毎日放送のワイドショーの司会や、近畿放送（KBS京都）「お早うキンキハイハイ福郎です」（月々金曜）に出演。その後も毎日放送「スタジオ2時」（月々金曜）や、関西テレビ「競馬中継」（日曜）などの司会を務めるなど、相変わらず露出は多かった。

元祖・売れっ子タレントに

した。作家・織田正吉は、ラジオ関西「笑福亭福郎の歌謡ジョッキー 歌う人生天眼鏡」「福郎のたちよみ文庫」、朝日放送「福郎図書館」「今晩は福郎です」などの番組で脚本を担当し、福郎の漫談台本も執筆したが「彼ほど台本をよく表現してくれた人はいなかった。すごい才能だと思う」と語っている。

ただ、普段ステージなどで

福亭から森乃へと改めた。昭和40年には、若手漫才のホープ、上方柳次・柳太と「爆笑大阪三人組」を結成して松竹芸能の演芸場でコメディアンとしても売りだした。

その勢いが落ち着いた若い晩年は、落語会などで艶笑落語や師匠筋の桂文之助系統の「大丸屋騒動」「象の足跡」「滑稽清水」といった珍しい落語をたびたび高座へかけている――。

「酔いどれ波止場」（大映）、「大番頭小番頭」（松竹）といった映画や、関西テレビ「どん一代」「蝶子はん」などのテレビドラマでは役者として活躍した。当時を振り返る――。

（つづく）